道徳教育地域支援委託事業実施報告書（令和３年度）

１　学校の概要

⑴　**学校名**　　善通寺市立西中学校

⑵　**所在地**　　香川県善通寺市文京町四丁目1番1号

⑶　**学年別児童生徒数及び学級数、教員数**　　（令和3年4月1日現在）

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援学級	児童生徒数計	教員
3学級 95名	3学級 93名	3学級 79名	3学級 11名	278名	27名

２　研究主題等

⑴　**研究主題**

互いに支え合い　高め合い、生き方についての考えを深める特別の教科　道徳をめざして

～道徳的価値を深める「考え、議論する」授業や振り返りを通して～

⑵　**研究主題設定の理由**

本校では、学校教育目標「互いに支え合い　高め合いながら　課題の解決に努める生徒の育成」の下、日々の学校生活や学校行事で得られる協働感及び達成感が生徒の成長につながると共通理解し、互いを認め合う仲間づくりに取り組んでいる。平成３０年度、令和元年度に本事業の研指定を受け、その後も継続して道徳教育の推進を行ってきた結果、令和２年度の県学習状況調査における生徒質問紙調査の社会性・道徳性に関わる質問項目では、肯定的な回答がおおむね県平均を超えた。しかし、将来の夢や自己肯定感に関する項目では肯定的な回答は県平均を下回る結果となった。

そこで、校内指導体制の見直しによる、授業及び教育活動全体を通じた道徳教育の更なる推進により、多様な体験を積み重ね、道徳的価値を基に自己を見つめ、互いの考えを交流し合うことにより、人としての生き方について、多面的・多角的に考えさせる指導方法を模索し、本校の教育目標を実現したい。

⑶　**研究内容及び方法**

①　道徳教育の充実を促す指導体制

ア　３プロジェクト（教材・連携・環境）及び学年チーフによる指導体制の充実（チームで取り組む姿勢）

イ　教科を横断する全体計画、年間計画、別葉の作成

ウ　道徳教育に関する校内研修の実施（授業力向上）

②　道徳的価値について多面的・多角的に考えさせる授業づくり【教材プロジェクト】

ア　教材への自我関与の意識を高める問題解決的な道徳学習

（道徳的価値の理解を深めるための指導方法の改善）

イ　中心発問の改善（時間・対象・条件・本質軸を変えた発問と問い返し）

ウ　振り返りの充実（内省的思考へと導く視点の改善）

③　家庭・地域との連携・協力【連携プロジェクト】

ア　道徳通信の発行（家庭や地域への情報発信：月1回程度）

イ　地域とつながる道徳（校内外ボランティアの実施）

④　学校内における道徳に関する支持的風土づくり【環境プロジェクト】

ア　朝道徳や授業風景の記録及び共有環境の整備

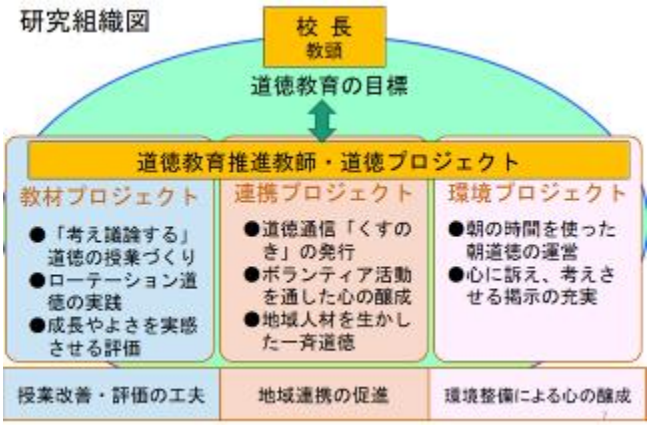
イ　道徳的価値を深める掲示の作成

３　研究実践

①　道徳教育の充実を促す指導体制

ア　３プロジェクト（教材・連携・環境）及び学年チーフによる指導体制の充実（チームで取り組む姿勢）

研究を推進する上で、校内体制は非常に重要である。校長の教育方針の下、道徳教育推進教師を中心に、全教師がチームとして取り組める体制づくりこそ、すべての出発点である。そこで、本校では、全教師が、３つのプロジェクトに所属し、研究・実践を進め、さらに深化させたいと考えた。

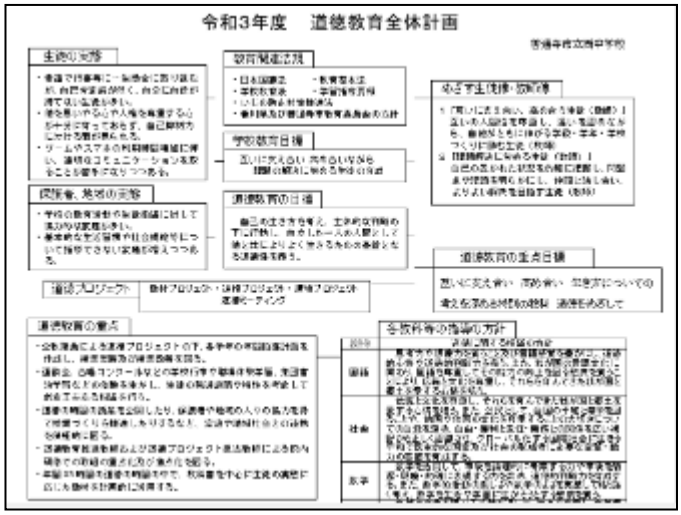


１つ目は、「考え議論する」授業づくり、ローテーション道徳、評価に関することなどを担当する「教材プロジェクト」である。

２つ目は、道徳通信の発行や地域ボランティアの中核となる役割を果たす「連携プロジェクト」。今年度は新型コロナウイルスの影響を受け実施に至っていないが、例年は、地域の人材を生かした道徳として、ゲストティーチャーを招いた全校道徳も行っている。

３つ目は、朝の時間を使った朝道徳の運営や、生徒の心に訴える掲示などを担当する「環境プロジェクト」である。それぞれのプロジェクトが、「授業改善・評価の工夫」や「地域連携」、「環境整備による心の醸成」という役割を担う。そして、それぞれが相互に関わり合って、本校の道徳教育の目標達成に向けて取り組む。各学年団の教師が、それぞれのプロジェクトに分担して所属することで、学年を超えて連携を深め、円滑な運営ができると考えた。

イ　教科を横断する全体計画、年間計画、別葉の作成



【全体計画】年度初めに全教師が共有。学年毎の指導計画も作成　　【別葉】東京書籍の別葉作成ツールを使用して作成

学校の教育活動全体を通して道徳教育の目標を達成するためには、校長の方針の下、道徳教育推進教師を中心に、全教師が協力して道徳教育を展開していくことが大切である。道徳教育全体計画は、学校における道徳教育の基本的な方針を総合的に示したものであり、道徳の授業等を充実させ、円滑な教育活動の実践のために全教師への周知が必要である。また、学校・地域の特色や実情を考慮して別葉を作成することで、道徳科の授業と各教科や特別活動等との関わりを具現化し、全体計画を具体的な指導に活かすことができる。

ウ　道徳教育に関する校内研修の実施（授業力向上）

今年度は、全教師の道徳教育に対する意識を高めるために様々な取組を実践した。

研究授業に向けての授業づくりにおいては、担任やプロジェクトに属している教師以外も参加して指導案検討会を行った。本校では平成３０年度から学年の全教師によるローテーション道徳を行っている。ローテーションに沿って担当になった教師が道徳の指導案を作成し、各クラスを回りながらその指導案の授業を行う、ローテーション道徳の方法を取ってきた。メリットとして、教師は十分な授業準備ができること、同一教材での授業の積み重ねにより教材研究が深まること、生徒は様々な教師の授業を受けることができる、ということがあげられる。

教材研究は授業を支える大きな要素であるが、指導案検討会やローテーション道徳を行うことで、担任や授業担当者に限らず全教師が教材研究を進めることができた。研究授業の後には、香川大学　清水顕人准教授、県教育委員会義務教育課　深澤裕幾主任指導主事にご指導をいただき、学習活動や中心発問の在り方について研修を重ねた。

また、指導案検討会や授業への参観を計画・実施することで、多くの教師が多面的に生徒を評価したり、T2的な役割で授業に入ることで、じっくりと生徒の見取りができたりするなど、評価の面でもメリットがあったと考える。

その他、研究大会の研修内容の周知はもちろん、朝道徳の資料作成のローテーション化などにより、全教師で道徳教育に関して様々なアンテナを張り、考え、アイデアを出し合う体制ができてきたと考える。

② 道徳的価値について多面的・多角的に考えさせる授業づくり【教材プロジェクト】

ア　教材への自我関与の意識を高める問題解決的な道徳学習

（道徳的価値の理解を深めるための指導方法の改善）

道徳の授業実践において、教材から得られる道徳的価値の理解に終始するだけではない、質的な変換を図るためには、生徒自身の「登場人物への自我関与」が重要である。「自我関与」とは資料の登場人物の心情の読み取りを重視するのではなく、自分自身を投影させて考えることである。他人事ではなく、自分事として捉えさせるために、「あなたならどうするか？」という発問の構造となるように心掛けている。

実践　1年　教材名「風を感じて－村上清加のチャレンジ」　A　希望と勇気、克己と強い意志

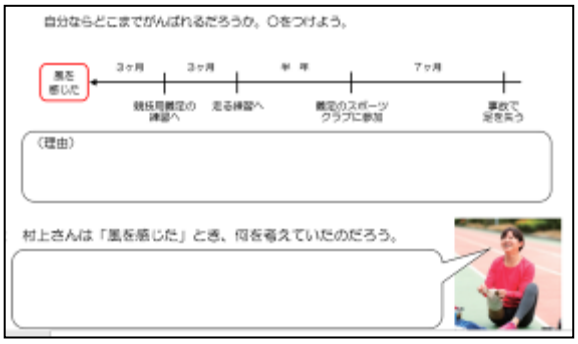
本教材は、突然の事故で右脚を失い、悩みや苦しみを感じながらも、弱気な面を前向きな強い気持ちで抑えながら、努力を重ね続けパラリンピック選手を目指した村上清加さんの半生を紹介する内容である。

中心発問は、「あなたなら同じようにチャレンジできる？」とした。

授業者による1回目の授業を参観したあと、学年団やプロジェクトの枠を越えた教師が集まり、中心発問や学習活動の流れなどの視点で指導案検討会を行った。その中で、課題として「中心発問が生徒にとって分かりづらい。」ということがあげられた。これは、村上さんと同じ障害を持つ立場で考えるのか、それとも生徒自身が今困難に感じ

ることに対して考えるのかというのかが曖昧だという点と、村上さんが経験した困難の、どの部分までのチャレンジを考えるのかがわかりにくいという点での２つのわかりにくさがあった。

この課題に対し改善案として、中心発問を示したあと、村上さんが負ってきた困難をスケールに表し、自分ならどこまで頑張ることができるかを考えさせるというものと、スケールに表す活動のあとに、村上さんが困難を乗り越えられたのはなぜか、自分が困難にぶつかったときにどう乗り越えていくかを考える時間を取るというものが採用された。



この改善案によって変更したワークシートが右のものである。村上さんが、足を失い、アスリートになるまでを数直線に表している。

実際の授業では、個人で考えたあと、黒板に示されたワークシートと同じ形の数直線に名前磁石を貼る活動を設けた。自分の意見と違う意見を持つ級友がいることが目で見て分かり、班での意見交流への良い刺激になっていた。その活動のあと、中心発問の２段階目として、村上さんが困難を乗り越え「風を感じた」とき、何を考えていたのか考えた。１段階目の活動で、村上さんの抱えた困難について自分事として考えることができていたので、達成感の大きさや努力すれば報われることがある素晴らしさをより真実みをもって考えることができていた。

生徒が教材の登場人物に自我関与し、自分事として中心発問について考えるためには、中心発問の内容を吟味することはもちろん、どのような手立てを講じ、どのような学習活動の順番で考えさせればよいかを一つ一つ重視して考えることが必要である。

イ　中心発問の改善（時間・対象・条件・本質軸を変えた発問と問い返し）

考え、議論する道徳の授業実践のためには、「互いに聴き合い、自他の考えをつなげる」、「自己内対話し、自分の意見を確実に持つ」といった視点での中心発問の吟味が必要である。

考え、議論する道徳とは、単に活発な議論を目的とするのではなく、自己の内面的成長を図る内容になっているかが重要であると考えた。以下に、時間・対象・条件・本質軸を変えた発問を行った実践と、問い返しに重きをおいた実践について紹介する。

実践A　１年　教材名「銀色のシャープペンシル」D－(22)よりよく生きる喜び

拾ったシャープペンシルを黙って自分のものにしてしまった「ぼく」は、理科の時間に、友人にシャープペンシルを盗ったことを疑われた際、「自分で買った」と嘘をつき、見つからないうちに持ち主のロッカーに返した。その日の夜、心にもやもやしたものを抱えながら「ちゃんと返したんだから文句はないだろう」とふてくされていたところに、シャープペンシルの持ち主であった友達から電話が来て、「疑ってごめん」と謝られてしまう。その結果、「ぼく」は自分の過ちを責める気持ちと、言わなければばれない、友人との関係を壊したくないという「心の弱さ」の間で葛藤するという内容である。中学生の時期に経験する「心の弱さ」を扱った不変的な教材である。

この授業での中心発問は、授業を重ねるごとに右のように変化していった。中心発問①では、何を「ぼく」が理解したかという資料の本質軸を問う発問である。卓也が電話で謝罪したあと、「ぼく」の心に

中心発問①
「何がぼくを卓也の家に向かわせたのか」
↓
中心発問②
「あなたがぼくならどの場面で謝るか」
↓
中心発問③
「あなたならどうする
（いつなら謝れるか・いつなら許せるか・本当に謝れるか）」

どのような変化が表れたかを自分事として考えさせるねらいがあったが、「自分が悪いことをしているので謝らなければならなかったから」という道徳的価値に生徒の思考が固定されやすく、考え、議論する幅が狭いと感じた。

中心発問②は、「ぼく」の立場を自分事として考えるため、謝るタイミング（時間軸）を変えて問う発問である。シャープペンシルの持ち主であった友達に本当のことを話すタイミングが何度かあった。自分が「ぼく」ならどの場面で本当のことを告げるか。またその理由が何か考えることで、正直に伝える時に何が妨げになり、何が背中を押すのか考えるねらいがあった。しかし、授業を実践した学級の生徒の実態を考え、早期に謝ることが大切だという意見が大多数を占める予想が立てられた。早期に謝罪することは確かに望ましいが、実際にできるかどうかは分からない。より現実的に、謝らなければならないが、なかなか謝れない自分の弱さに気付けるようにしたいという課題が発見された。

最終的な中心発問は③の内容になった。謝るタイミングがいつかという発問よりも、一層自我関与の要素を強めるために、実験の場面に焦点化し、その場面で本当に謝れるかを考えさせた。自分事として本当に謝れるか（人間の弱さ＝本質軸）を考えることに加えて、人前でも勇気を出して正義を通そうとする姿勢が大切であると考えさせたいというねらいがある。

実際に中心発問③で行った授業の生徒の振り返りを紹介する。

- 自分では謝れると思っていても、弱い自分が心の中にいると知った。
- 悪いことをしてしまっても許してもらえるか不安で謝れないこともある。そんな弱い部分は誰にでもあるが、勇気を出して乗り越えることが大切だし、そんな人になりたい。

この教材のように、友人とのトラブルを扱った内容のものは、生徒の生活体験が表れやすく、活発な議論ができることが期待される。一方で、決まりきった価値観による考えや「そうすべき」という概念に縛られた考えが多くなることも考えられる。いかに生徒の本音を引き出し、「正しさ」を理解させるだけでなく、人間誰しもが持つ「弱さ」やそれを克服することの大切さを考えさせるかが授業における重要なポイントである。

実践B　２年　教材名「宝塚方面行き－西宮北口駅」C-(10)遵法精神、公徳心

掃除当番をしている友人のために、混雑した電車の座席をカバンで取っていたミサ。周囲の状況からは不適切な行動を取るミサとその友人に厳しい態度で叱責するおじいさん。ミサとおじいさんのやりとりを通して公共の場での適切な言動を支える心の在り方とは何かを考える教材である。

中心発問は、「マナーはなぜ守るのか」である。この発問に対して生徒は、「公共の場所で迷惑をかけてはいけないから」という道徳的価値がすぐに考えられる。しかし、カバンを座席に置いて席取りをしてしまったミサと、混雑している電車内で怒鳴ったおじいさんのそれぞれの立場に添った問い返しを行うことで、生徒を揺さぶり、ミサの行動を多面的・多角的に捉えさせた。

- ミサ達が下車したことは悪かったか。（対象軸）
- おじいさんの指摘にそのまま黙っていたらダメか。（条件軸）
- 「場所取りはしてはいけない」は決まり事なのか。（破れば何か罰則があるのか）（本質軸）
- 罰則もないマナーなら別に守らなくてもいいのでは？（条件軸）

「マナーは守らなければいけない」という個人の考えを明確にした上で、全体活動やグループ活動を活発化させながら、対象軸や条件軸を変えた発問で個人の考えを揺さぶった。分かりきった道徳的価値観を道徳的実践力につなげるためにさらに深く理解させることができたと感じる。

また、振り返りを行う際には、１年次の教材「本が泣いています」で学習した「公共」＝「社会全体（その場に所属するみんな）が関わること」という意味を確かめた。学んだことを確かめ、学年のつながりを意識し、生徒の思考や学習内容が進化していることを実感させる工夫も行った。

ウ　振り返りの充実（内省的思考へと導く視点の改善）

道徳が教科化となり、評価を記述で行うにあたって、授業で使用したワークシートにある生徒自身の「振り返り」を参考にしている。生徒が、その授業で何を理解したかを自分の言葉で書くことで、「いろいろな立場から考えようとする姿」や「自分自身との関わりの中で考えようとする姿」などを見いだして評価することに繋がっている。今年度は、生徒理解や学習指導要領の趣旨理解を深めることはもちろん、継続的に生徒のよさや成長の様子を適切に見取っていくことをねらいとして、振り返りに３つの視点を設けた。「わかる」・「つなぐ」・「生かす」の３観点である。

まず、道徳科における「わかる」とは、私たち人間が、道徳的行動を行う際の根拠となる、道徳的諸価値についての理解のことである。例えば、学校のトイレのスリッパをそろえるという行動ができたとき、その行動の根底には、「公共の場所にあるものは使う人みんなが大事にするべきだ」という認識がある。この認識があるからこそ、道徳的行動が実践できる。『なぜ〇〇することが大切なのか』の『なぜ』の部分への理解が「わかる」である。

道徳科における「わかる」

道徳的行動を行う裏付けとなる道徳的諸価値についての理解。

（例）
学校のトイレではスリッパをそろえる（道徳的行動）
↑
公共の場所はみんなで整える（道徳的価値）

道徳科における「つなぐ」

本時の学びを通して、自己をどのように見つめるか。
道徳科の学びは、A「自分自身」、B「人(他者)」、C「集団や社会」、D「生命や自然、崇高なもの」との関わりからなっている。
道徳科におけるよりよく生きるとは、**それらの対象と自分の関係をどう作っていくかと**いうこと。授業の中で**「わかった」**ことが**自分にどう関係しているか。**

道徳科における「生かす」

本時の学びから、これからの人間としての生き方についての考えを深める。
「わかる」、「つなぐ」をふまえて、これからどう行動（発言）していきたいか。
「わかる」、「つなぐ」をふまえて、生活を**よりよい**ものにしようと努力したり、工夫したりする。

参考文献：石丸憲一　著
ルーブリック評価を取り入れた道徳科授業のアクティブラーニング

次に、道徳科における「つなぐ」とは、本時の学びを通して、自己をどのように見つめるかということである。道徳科の学びは、学習指導要領における指導事項にある、A「自分自身」、B「人(他者)」、C「集団や社会」、D「生命や自然、崇高なもの」との関わりからなっている。つまり、道徳科におけるよりよく生きるとは、それらの対象と自分の関係をどう作っていくかということである。授業の中で「わかった」＝「理解したこと」が今の自分にどう関係しているか、今までの自分はどうだったのかとつなげて考えるのが「つなぐ」である。

そして、道徳科における「生かす」とは、「わかる」、「つなぐ」をふまえて、自分はこれからどう行動（発言）していきたいかということである。ここでは、「わかる」、「つなぐ」をふまえて、自分自身の生き方をよりよいものにしようと努力したり、工夫したりする生徒の姿が見えてくる。

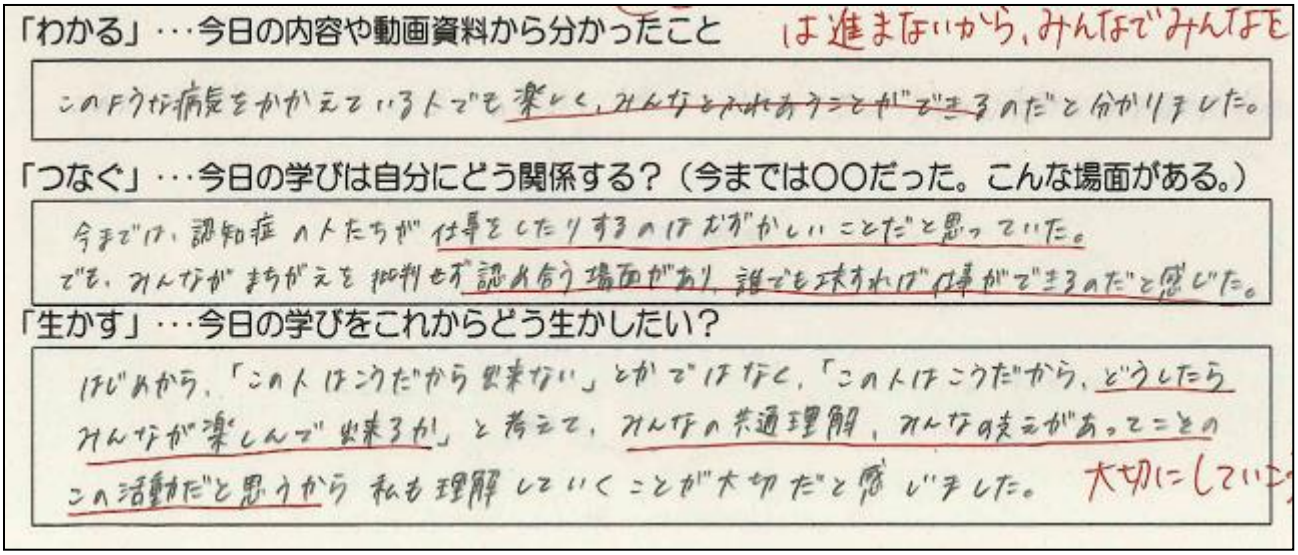
これらは、石丸憲一　著　『ルーブリック評価を取り入れた道徳科授業のアクティブラーニング』を参考にまとめている。

実践　２年　教材名「注文をまちがえる料理店」B－(9)　相互理解、寛容

認知症を抱えた方達が働く、「間違いを受け入れ、一緒に楽しむ」をコンセプトにしたお店の活動を知り、認知症への理解を深めるだけでなくの個性や立場を尊重する寛容の精神を育むきっかけとなる教材である。

教材を読んだり、動画を視聴したりしながら、料理店の発案者の考え方やものの見方に触れ、個性や立場を尊重し広い心を持つということはどういうことかについて考えた。

この授業での生徒の振り返りが下の通りである。


「わかる」…今日の内容や動画資料から分かったこと　は進まないから、みんなでみんなを

このような病気をかかえている人でも楽しく、みんなとふれあうことができるのだと分かりました。

「つなぐ」…今日の学びは自分にどう関係する？（今までは○○だった。こんな場面がある。）

今までは、認知症の人たちが仕事をしたりするのはむずかしいことだと思っていた。
でも、みんながまちがえを批判せず認め合う場面があり、誰でも工夫すれば仕事ができるのだと感じた。

「生かす」…今日の学びをこれからどう生かしたい？

はじめから、「この人はこうだから出来ない」とかではなく、「この人はこうだから、どうしたらみんなが楽しんで出来るか」と考えて、みんなの共通理解、みんなの支えがあってこそのこの活動だと思うから私も理解していくことが大切だと感じました。　大切にしていこ

「わかる」において、病気や障害の有無に関わらず誰もが生き生きと輝ける場所があることを理解した様子がうかがえる。「つなぐ」においては、今までの自らの認知症という症状への理解と、学んだことからの変化が表れている。「生かす」において、これからどのような考え方をしていきたいかをまとめている。

この３観点の振り返りを実践するまでは、授業の終わりに振り返りを書かせても、書くことが苦手な生徒は、自分の思いや考えを言葉にして書けない場面が多く見受けられた。また、書けていても、感想に終始しており、自己を見つめる、他者の良さを認めるような内容が乏しく、生徒が何を学び、どのように意見が変容したのか見取りにくかったという実態があった。

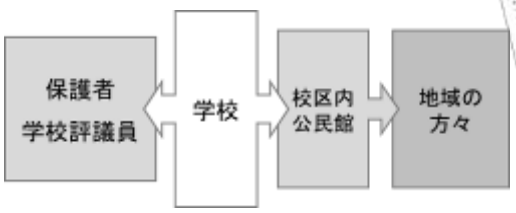
しかし、この３観点の振り返りの実践を行ってからは、書くことが苦手な生徒も「わかる」の部分や「つなぐ」の部分なら書くことができたり、書く内容も同じことの繰り返しに終始したりせず、観点毎に内容が整理され、より生徒の考えの変容や学びのあとがわかりやすくなったと感じる。この３観点による振り返りの実践は続けていきたい。

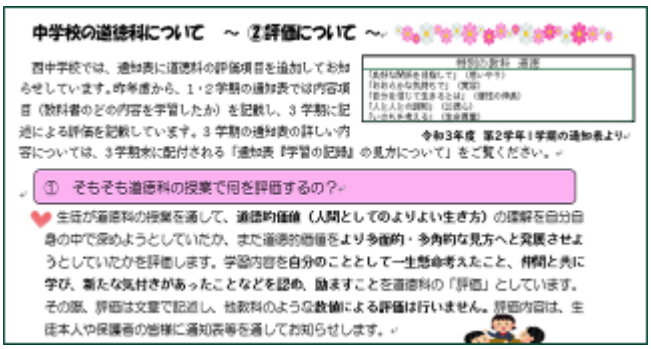
③　家庭・地域との連携・協力【連携プロジェクト】

ア　道徳通信の発行（家庭や地域への情報発信）

本校では、平成３０年度より道徳通信「くすのき」を発行している。タイトルの「くすのき」は、中庭から全クラスを見渡す本校のシンボルである。地面に力強く根を張り、どっしりとした幹でそびえ立つ楠の木のように、様々な経験を自分が成長する機会と捉え、栄養分をしっかりと吸い上げ、豊かな心を育ててほしいと願い、このタイトルをつけた。

通信は、保護者や学校評議員はもちろん、校区内の公民館にも配布しており、そこからさらに地域の方々に配布していただくようにしている。





中学校の道徳科について　～②評価について～

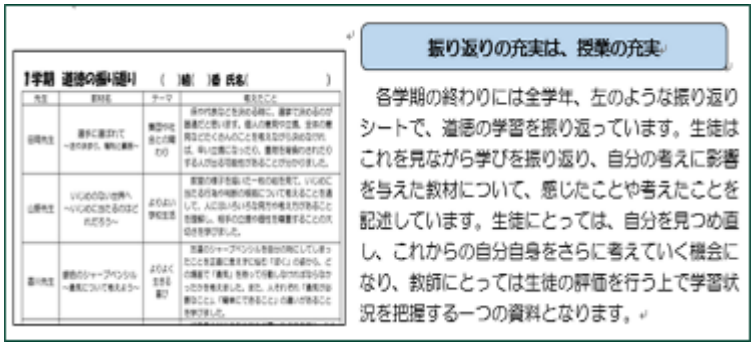
西中学校では、通知表に道徳科の評価項目を追加してお知らせしています。昨年度から、1・2学期の通知表では内容項目（教科書のどの内容を学習したか）を記載し、3学期に記述による評価を記載しています。3学期の通知表の詳しい内容については、3学期末に配付される「通知表『学習の記録』の見方について」をご覧ください。

特別の教科　道徳
「自分は何のために生きているか」（思いやり）
「おおらかな気持ちで」（実践）
「自分を信じて生きるには」（信頼の伸長）
「人と人との関係」（公徳心）
「いのちを考える」（生命尊重）

令和3年度　第2学年1学期の通知表より

① そもそも道徳科の授業で何を評価するの？

生徒が道徳科の授業を通して、道徳的価値（人間としてのよりよい生き方）の理解を自分自身の中で深めようとしていたか、また道徳的価値をより多面的・多角的な見方へと発展させようとしていたかを評価します。学習内容を自分のこととして一生懸命考えたこと、仲間と共に学び、新たな気付きがあったことなどを認め、励ますことを道徳科の「評価」としています。その際、評価は文章で記述し、他教科のような数値による評価は行いません。評価内容は、生徒本人や保護者の皆様に通知表等を通してお知らせします。



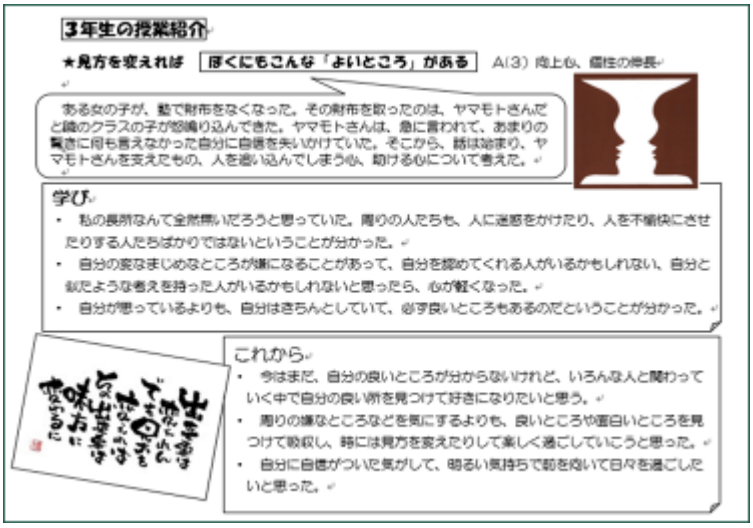
1学期　道徳の振り返り　（　組　番 氏名　）

月日	教材名	テーマ	考えたこと
日時未定	選手に選ばれて ～おかあさん、華和に乗る～	集団や社会との関わり	自分が大切なことをおもう時に、選手に選ばれるのが普通だと思います。個人の実力や立場、全体の雰囲気などたくさんのことを考えなければならないのだが、中々出来ないなかで、最初を最後のかたちとする人がなる可能性があることがわかりました。
山田先生	いじめのない世界へ ～いじめに立ち向かおうだろう～	よりよい学校生活	家庭の様子を通じて一枚の絵を見て、いじめに当たる行為の明確の相違について考えることを通して、人に思いやりを持ち何かを見方が出来ることを理解し、相手の立場や感性を尊重することの大切さを学び深めました。
森川先生	最後のシャープペンシル ～最後について考えよう～	よりよく生きる喜び	友達のシャープペンシルを自分が所有してしまったことを友達に言えずに悩む「弱い」心があり、この葛藤で「勇気」を持って行動しなければならないことを考えました。また、人それぞれ「勇気が出ること」「勇気にできること」の違いがあることを学びました。

振り返りの充実は、授業の充実

各学期の終わりには全学年、左のような振り返りシートで、道徳の学習を振り返っています。生徒はこれを見ながら学びを振り返り、自分の考えに影響を与えた教材について、感じたことや考えたことを記述しています。生徒にとっては、自分を見つめ直し、これからの自分自身をさらに考えていく機会になり、教師にとっては生徒の評価を行う上で学習状況を把握する一つの資料となります。

通信では、おもて面に道徳科に関する基本的な情報を掲載している。たとえば、道徳の評価の方法や、学期末に行う振り返りの取組など、保護者の方にもわかりやいよう工夫して知らせている。



3年生の授業紹介

★見方を変えれば　ぼくにもこんな「よいところ」がある　A(3) 向上心、個性の伸長

ある女の子が、駅で財布をなくなった。その財布を取ったのは、ヤマモトさんだと隣のクラスの子が怒鳴り込んで来た。ヤマモトさんは、急に言われて、あまりの驚きに何も言えなかった自分に自信を失いかけていた。そこから、話は始まり、ヤマモトさんを支えたもの、人を追い込んでしまう心、助ける心について考えた。

学び
- 私の長所なんて全然無いだろうと思っていた。周りの人たちも、人に迷惑をかけたり、人を不愉快にさせたりする人たちばかりではないということが分かった。
- 自分の変なまじめなところが嫌になることがあって、自分を認めてくれる人がいるかもしれない、自分と似たような考えを持った人がいるかもしれないと思ったら、心が軽くなった。
- 自分が思っているよりも、自分はきちんとしていて、必ず良いところもあるのだということが分かった。

これから
- 今はまだ、自分の良いところが分からないけれど、いろんな人と関わっていく中で自分の良い所を見つけて好きになりたいと思う。
- 周りの嫌なところなどを気にするよりも、良いところや面白いところを見つけて吸収し、時には見方を変えたりして楽しく過ごしていこうと思った。
- 自分に自信がついた気がして、明るい気持ちで朝を迎えて日々を過ごしたいと思った。

道徳通信の作成は、主に道徳主任が行っているが、担当学年以外の授業の内容や、生徒の様子や振り返りを把握することは難しく、改善が必要であった。

今年度は、授業の内容に関する部分を各学年の連携プロジェクトの教師で作成することで、無理なく通信が発行できるように工夫している。

イ　地域とつながる道徳（校内外ボランティアへの参加）

例年、毎年本校では、各界で活躍している方々を招き、講演を聴く機会を設けている。様々な分野の方々から話を聴くことを通して、物事を広い視野から多面的・多角的に考えたり、人としての生き方を考えたり、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てたりすることをねらいとしている。また、それぞれの講演は、保護者や地域の方々にも案内をし、参加していただくことで家庭の中での道徳に関する共通の話題を提供していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、今年度は全校を対象にした講演の機会を設けることができていない。

生徒が様々な人の生き方に触れ、自分を見つめる機会が減ったことは残念であるが、２年生では本校 OB 航空自衛隊隊員の方を招聘し、話を聴くことができた。今後も進路学習や職業調べなど他の学習と連携するなど教科横断的な視点から、自分の将来や「よりより生き方」について考えられるような取組を行いたい。

また、地域とつながるために、地域を大切に思う心を育てる様々なボランティア活動を行っている。

ボランティア活動

- 朝のあいさつ・清掃ボランティア
- お接待ボランティア
- 善通寺養護学校夕涼みボランティア
- 市民ふれあいフェスティバルボランティア
- 医療センター屋上庭園ボランティア
- 街頭募金ボランティア
- 幼稚園ふれあい体験　など

○朝のあいさつ・清掃ボランティア
○いでざらいボランティア　の実施

総本山善通寺の境内で、お遍路さんや観光客の方にお茶などをふるまう「お接待ボランティア」をはじめとし、市内の施設や団体と協力し、多くの校外でのボランティア活動を行っている。しかし、こちらも新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、今年度現在までで実施できているのは、校内のボランティアだけである。

今年度は学校の前にある公道の溝清掃と、校内の普段清掃しない場所の清掃ボランティアを、香川県の方言を使い「いでざらいボランティア」と名付けて実施した。校内のボランティア活動を通じて、人と協力する

ことや他者との関わりを大切にする心や、自分たちの学校や活動への誇り、郷土を大切に思ったり知ろうとしたりする心など、たくさんの心の成長に繋がっている。

いでざらいボランティアに参加した生徒の感想

- 初めてボランティア活動に取り組みました。最初は楽しくないと思っていたけれど、たくさん汚れを落とすことができて楽しくなりました。学校を使う人みんなに、いい気分で使えるようになってほしいという気持ちを込めて取り組みました。
- 少しの時間でもみんなで協力して、１つの作業に集中すればたくさんのゴミが集まって気持ちがよかったです。また、達成感がありました。学校のために、みんなのために活動できて本当にやってよかったなと思いました。
- ボランティアをして、普段この場所を掃除してくれている人の大変さが分かりました。また、人の役に立つことをするというのは、こんなに気持ちいいことなんだなと改めて思いました。これからは教室で見つけたゴミを捨てたり、困っている人に声をかけたり、自分にできるボランティアを頑張りたいです。
- ３年生しか使わない場所も１・２年生が一生懸命一緒に掃除してくれて嬉しかった。コロナ禍だけど、３学年みんなで協力できることもあるんだと分かりました。

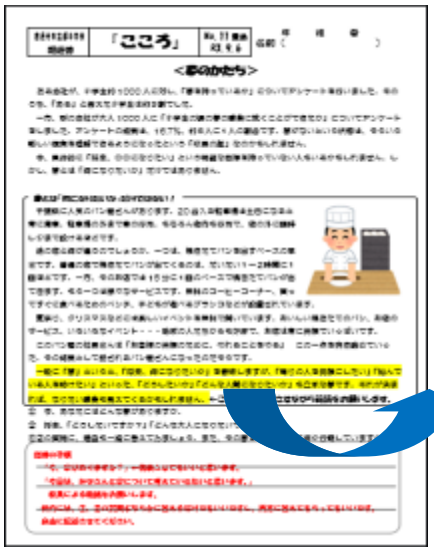
④　学校内における道徳に関する支持的風土づくり【環境プロジェクト】

ア　朝道徳や授業風景の記録及び共有環境の整備

学校における道徳教育は、道徳の時間を要として、学校生活全体において行われるものとされている。本校では、日常生活の中で生徒の心を育むために、毎週月曜日の朝学活の時間を朝道徳「こころ」の時間として、様々な資料を紹介し、感想を書いてもらうという取組を行っている。この活動も平成３０年度より継続して行っているが、今年度はICT機器も積極的に活用し、映像や音源なども使って資料内容の充実を図った。

朝道徳の時間に生徒に資料を読み聞かせたり、提示したりするのは担任もしくは副担任である。資料の作成において、昨年度までは、道徳プロジェクトに所属する教師だけで資料を用意しており、個人の負担が大きかった。今年度は、各教師が個性や持ち味を発揮したり、資料で扱う内容項目の偏りを防いだりすることもねらいとして、資料の作成は管理職も含めた校長及び全教師でローテーションを組んで行った。

具体的には、その週の資料担当教師が、前週の金曜日までに全教師に資料を配付・準備している。資料担当教師が指導のポイントや強調してほしい内容をまとめた朱書きを添えることで、どの教師が指導しても共通の認識が得られるよう工夫している。道徳の教科化により、授業は教科書を使って行うが、過去の道徳資料や本、ニュース、インターネット記事などには、生徒に知って欲しい、考えて欲しいと思う題材が多くある。今後もそういった資料を定期的に紹介し、生徒の心の成長に繋げたいと考える。



〈夢のかたち〉

このパン屋の社長さんは「お客様の笑顔のために、やれることをやる」　この一点を突き詰めていった。その結果として愛されるパン屋さんになったのだそうです。

一般に「夢」というと、「将来、何になりたいか」を意味しますが、「周りの人を笑顔にしたい」「悩んでいる人を助けたい」といった、「どうしたいか」「どんな人間になりたいか」も立派な夢です。それが決まれば、なりたい職業も見えてくるかもしれません。

（一部抜粋）

①　今、あなたにはどんな夢がありますか。
②　将来、「どうしたいですか？」「どんな大人になりたいですか？」

左の「夢のかたち」という資料は、まだ将来の夢や目標がはっきりと定まらない生徒に、希望ややりたいことを見つけるための考え方の方針を示す、分かりやすい内容となっている。資料に、各担任の体験談や思いを加えて語ることで、生徒の心を刺激し、将来の自分について考えるきっかけとなる。

また、資料について、昨年度までは学年毎に使用する資料が違うこともあった。しかし、今年度は自分と違う立場の人の意見（異学年の生徒）の意見に触れる機会の充実が図られるよう、全学年が毎週月曜日に同じ資料を読み、校内の廊下に朝道徳コーナーを作って掲示するようにした。

上記の資料「夢のかたち」への感想も、学年毎の個性や、生徒それぞれの思いがよく表れている。

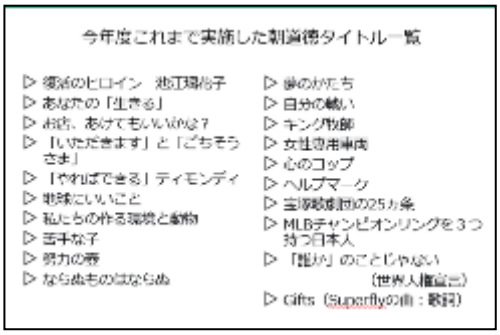
1年生
- 私はパンが好きで、おばあちゃんがパンの工場で働いているから、パン屋さんになりたいです。
- いつも明るく笑顔いっぱいな大人になりたい。笑顔がないと楽しくないから。

2年生
- 僕は料理人になりたいという夢があります。その夢は、ご飯が食べられない人にも食べさせてあげたいという強い思いと共にあります。将来は自分のことだけでなく、他の人を気遣ったり、みんなを笑顔にできるそんな大人になりたいです。

3年生
- 私は「社会の大きなネジに加われる」大人になりたいです。特に、これという仕事に就きたいということはなくて、何か、働きたい、自分のやれることをやりたいという感じです。社会には、誰かがやらなければいけない仕事であふれていて、その大きなネジの中に入れたらいいと思っています。

右が今年度これまでに行ってきた朝道徳のタイトルの一覧である。毎回担当する教師や資料の内容が違うので、生徒は新鮮味を感じ、興味を持って資料を読んでいる。

前述の通り、読み物資料だけではなく、ICT機器を活用して動画資料や音楽資料を準備することで、各教科担当教教師の専門性や持ち味が表れた資料が、全教師の財産としても蓄積されている。


今年度これまで実施した朝道徳タイトル一覧

▷ 復活のヒロイン　池江璃花子
▷ あなたの「生きる」
▷ お店、あけてもいいかな？
▷ 「いただきます」と「ごちそうさま」
▷ 「やればできる」ディモンディ
▷ 地球にいいこと
▷ 私たちの作る環境と動物
▷ 苦手な子
▷ 努力の壁
▷ ならぬものはならぬ
▷ 夢のかたち
▷ 自分の輪い
▷ キング牧師
▷ 女性宰相
▷ 心のコップ
▷ ヘルプマーク
▷ 宗像憲法の25ヵ条
▷ MLBチャンピオンリングを3つ持つ日本人
▷ 「誰か」のことじゃない（世界人権宣言）
▷ Gifts（Superflyの曲：歌詞）

イ　道徳的価値を深める掲示の作成

①　朝道徳の掲示

毎週月曜日の朝の時間に全校で取り組んでいる朝道徳「こころ」の感想は、同学年の生徒の意見だけでなく、異学年の生徒も含めた多くの意見に触れてほしいと考え、全校生が通る校内の廊下に朝道徳コーナーを作って掲示している。生徒が自らの在り方や生き方を他者の考えと比較しながら、見つめ直すことができるような環境づくりになっている。

【朝道徳「こころ」の掲示】

②　生徒を励まし、心を温かくする掲示の工夫

本校では、校内の至るところに、元気になったり、優しい気持ちになれたりするような言葉やイラストを掲示している。悩んだり、立ち止まったりしたときに、そっと背中を押してくれるような言葉を並べた「心のアンテナコーナー」である。

【 校内掲示「心のアンテナコーナー」】

【生徒会が作成した大パネル掲示等】

玄関付近の廊下には、仲間と協力したり、絆を深めたりした行事や生活、学びを振り返る場として、多くの写真を掲示している。また、新年に向けての抱負や、なりたい自分の姿をクリスマスツリーの形で掲示したものは生徒会役員と連携して制作した。自分や友達が作った掲示物は、より温かみや安心感を与えるものとなっているようだ。

生徒が自らの在り方や生き方を見つめ直すことができるような、特に「いのち」や「人権」に関する内容、心が落ち込んでいる生徒を励ます内容など、掲示が生徒に与える心に沁みる価値は大きなものがある。

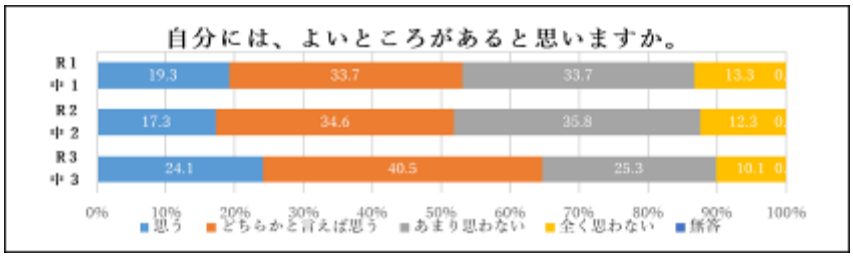
４　研究の成果と課題

（１）　成果

継続して研究を推進してきたことで、次の２点が成果として上げられる。

１点目は教師の道徳教育に対する意識の高まりである。プロジェクト会や指導案検討会、研究大会の研修内容の周知、研究授業、朝道徳などにより、担任はもちろん、担任以外の教師も、道徳教育に関して様々なアンテナを張り、考え、アイデアを出し合う体制ができてきたと考える。全教師で、教育活動、教育環境のあらゆる面で道徳教育を推進していこうという意識ができたことは大きな成果である。

２点目は、生徒の変容である。「研究主題設定の理由」であげた、生徒の自己肯定感の低さに改善が見られたことである。右のグラフは、現３年生の１年次及び２年次の県学習状況調査、今年度の全国学力調査の生徒質問紙調査の結果からみた経年比較である。

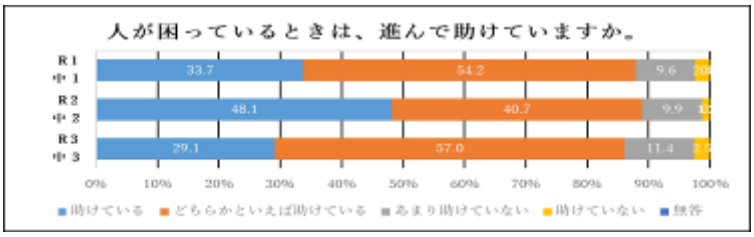
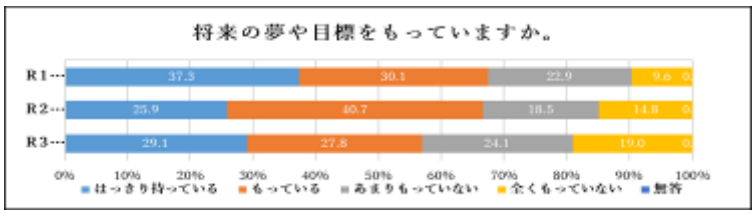


生徒の実態で課題としてあった、自己肯定感に関わる質問項目「自分にはよいところがあると思いますか」という項目で、肯定的意見を持つ生徒の割合が大幅に増加している。昨年度より、道徳の時間を通じて、自他の個性を見つめて、よさを認める指導や、いろいろな立場になって、そのとき自分ならどうするか、自分に何ができるかについて考えさせる指導を繰り返してきた結果と考える。

（２）　課題

課題としては、次の３点があげられる。１点目は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、家庭や地域とつながる機会が減少したことである。講演会や授業参観の減少により、開かれた学校、地域と協力して取り組むという側面が薄くなったと感じる。道徳通信の発行頻度を高めたり、外部へ発信する機会を模索したりし、保護者や地域の方とともに道徳について考える時間を確保したい。

２点目は、今年度大きく改革した朝道徳の資料作成についてである。全教師でローテーションを組んで資料作成を行うことには、資料で扱う内容項目が偏らないようにというねらいがあったが、実際には各教師の良さが光った資料も多くあった一方、自分自身に関することを扱った内容に偏っていた。来年度は、内容項目ごとに教師のローテーションを組むなど、さらに工夫をして朝道徳を継続させていく。

３点目は、道徳的実践意欲や態度の育成の不十分さである。

右の２つのグラフは、現３年生の１年次及び２年次の県学習状況調査、今年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の結果からみた経年比較である。「人が困っているときは進んで助けていますか」という実践的態度に関する項目については、昨年度より消極的な回答が見られた。また、「将来の夢や目標をもっていますか」という項目では、肯定的な意見を持つ生徒の割合が大幅に下落した。道徳の授業改善や朝道徳の活性化により、道徳的判断力や自己の良さに気付く心の醸成は成果がみられるが、道徳的行動を実践できるまでの自信は育っていないと考えられる。研究を更に深め、自分の意見に自信を持たせることを通して、道徳的行動の実践につなげたい。